

03

ドレーピングにおけるシルエットと分量感
理解のための教材提案

The Proposal of teaching materials for
understanding silhouette and sense of
quantity in draping

名古屋ファッション専門学校・工科専攻主任
Nagoya Fashion College・Chief of Institute of Technology

伊藤 千春 Chiharu ITO

ファッション造形学科・准教授
Department of Fashion Design・Associate Professor

水嶋 丸美 Marumi MIZUSHIMA

1 はじめに

ボディに布を当てて衣服の型紙を作るドレーピングでは、シーチングが使用されることが多い。一般的にボディ(人台)の上下方向に布地の縦布目をあわせ、運動量や呼吸量としてのゆとりやシルエットの分量感などを加え、衣服の形を形成する。

ドレーピングを行う際に使用されているボディには、ゆとり(運動量や呼吸量)が加えられている工業用ボディが多く、ドレーピング教育の現場や専門的な検定試験でも同様の工業用ボディが使用されている^{[1][2]}。しかし、工業用ボディのゆとりのみでは衣服製作に必要な分量感は到底補えず、服種やデザインによるシルエットとしての分量感が追加される。また、ドレーピング教育においては、これらのゆとりやシルエットのための分量感を的確に伝えることが重要となる。

さらに、シーチングを用いたドレーピングは、初心者にとって非常に困難な時がある。特に、初めてドレーピングを学ぶ学生には布目によって伸びが異なるため、取扱い方によってドレーピングで作成したパターンを平面にした際に差が生じることがあり、ドレーピングで作成した型紙を再組み立てした場合、思った通りに再現できないことがある。これは、ドレーピングの際に使用するシーチングの取扱い方に起因すると考え、本研究では、初心者でも取扱いやすく、ゆとりの分量感を理解し、理想的なシルエットをつくることのできる教材を検討した。

2 方法

ドレーピング技術を習得するうえで、学生が分量感を理解するために最適と考えられる素材の条件として、①ドレーピングを行っている間に伸びないこと、②素材に方向性があること、③地直しなど準備の手間が省けること、④布地と同じようにボディに馴染む素材であること、⑤分量感が理解できるようにボディが透けて見えることが挙げられ、これらの条件に合致した素材であるソフトグリンカット(株式会社中日本アパレルシステムサイエンス社製)を使用し検討を行った。

また、身頃のドレーピングを行った場合のシーチングとの比較を行い、出来上がったシルエットと分量感について、それぞれの素材の特徴を比較し、教材としての検討を行った。

3 結果および考察

3.1 素材別によるドレーピング方法の比較と特徴

3.1.1 シーチングの場合

使用素材:株式会社日新社製シーチング6800



①前身頃



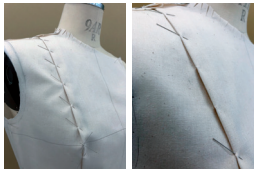
バストラインの水平を保ち、
肩ダーツをつまみピン打ち

ピン打ち拡大→



中心側に片返して、
伏せピンで組立て

【取扱い時の課題】



シーチングにピン打ちした場合、
布地の厚みでつりがやすい

②後ろ身頃



後ろ身頃もバストラインの水平を
保って肩・ウエストダーツをつまみ
ピン打ち



中心側に片返して、
伏せピンで組立て

③肩・脇



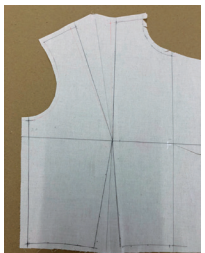
ダーツ同様に肩の位置でつまみ
ピン打ち前後のショルダーダーツ
位置を確認して伏せピンで組立て



脇は、シルエットを確認してつまみピン打ち前身頃
側に片返して、伏せピンで組立て

【取扱い時の課題】ゆとりの分量感がつかみづらい

●マーキングした後のシーチング



マーキング後平面にした際に地直し
が不完全な場合ゆがみによりずれが
できやすい
また、シーチングは扱い方によつても
ちぢみやゆがみがしやすい

図1/シーチングによるドレーピング

3.1.2 検討素材（ソフトグリーンカット）の場合

使用素材:株式会社中日本アパレルシステムサイエンス社製

ソフトグリーンカット



【特徴】

カールする方向を利用して
ボディにそわせるとなじむ

①前身頃

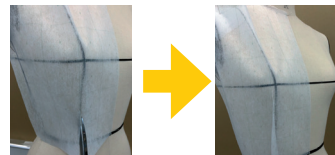


バストラインを水平に保ち、浮いた部分に切り
込みを入れ、重ねてテープで接着

ショルダーダーツ



ウエストダーツ



浮いた部分に切り込みを入れて重ねる

【特徴】切り込みを入れるだけで自然に重なり
ダーツ分量が明確化する

②後ろ身頃

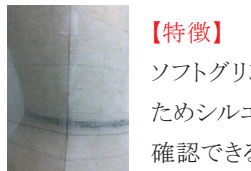


前身頃同様にバストラインを水平
に保ち、浮いた部分に切り込みを
入れると必要分が重なるため、
つまみテープで接着

③肩・脇



余分な縫い代を整理したら、前後
のゆとりの分量感を確認し重ねる
指で脇の分量を微調整してテープ
で接着



【特徴】

ソフトグリーンカットは薄くボディが透けて見える
ためシルエットをつくるための分量感やゆとりが
確認できる

●ラインでカットした後のソフトグリーンカット



平面にする場合には、切替え線やダーツ
などラインを決めてカットするだけで平面
のパターンができる

図2/ソフトグリーンカットによるドレーピング

今回検討のために行ったドレーピングの作業工程を図1・2に示した。初心者の学生にとってソフトグリンカットが実際に取扱いしやすい素材であるか比較・検討を行った結果、シーチング(布地)は、布目による伸びの違いや地直しが不十分な場合、出来上がったパターンに影響することが多かった。

しかし、ソフトグリンカットでは、地直しの技術が不十分な学生でも布目のゆがみや布地の伸びによる影響を抑えることができた。また、布地の特徴である布目を意識できるように縦緯に方眼の入った製品のため、学生は布目として意識することができた。

今回の検討素材は、ピンを使用しなくてもテープ接着で立体を作ることができ、ピンの打ち方による影響が少なかった。

3.2 素材別による身頃ドレーピングの ドラフティング重合図

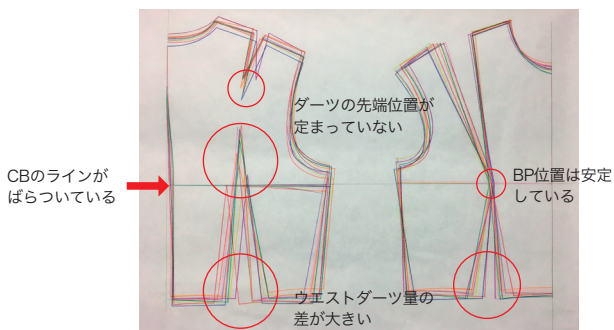


図3/シーチングによるドレーピング結果の重合図

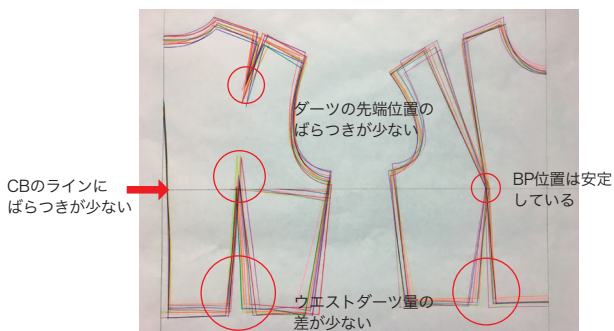


図4/ソフトグリンカットによるドレーピング結果の重合図

それぞれの素材別にドレーピングを行った結果を重合図にし、図3・4に示した。シーチング(布地)は、BP(バストポイント)位置は安定しているが、後ろ身頃の肩ダーツやウエストダーツの先端位置が定まらず、CB(後ろ中心)のラインのばらつきも多い。さらに、前も後ろもウエストダーツ量の差が大きい。これは、布地の布目による伸びの違いの影響と、前身頃に比べダーツの先端位置が明確ではないことにより差が生じたと考えられる。

一方、ソフトグリンカットは不織布であるものの布地の特徴である布目を意識できるように縦緯に方眼の入った製品であり、学生は布目として意識することができていたため、図4に示した通り、シーチングと比べ肩ダーツ、ウエストダーツ、CBのばらつきが少ない。これは、素材の特徴として切り込みを入れた場合、自然

にボディになじむため、個人の技術差が出にくかったと考えられる。

4 まとめ

ドレーピングを学ぶ上で学生にとってソフトグリンカットが実際に取扱いしやすい素材であるか検討を行った結果、以下のことがわかった。

1. シーチング(布地)は、布目による伸びの違いや地直しが不十分な場合、出来上がったパターンに影響することが多い。ソフトグリンカットでは、地直しの技術が不十分な学生でも布目のゆがみや布地の伸びによる影響を抑えることができた。
2. ソフトグリンカットは、布地の特徴である布目を意識できるように縦緯に方眼の入った製品のため、学生は布目として意識して作業することができていた。
3. 今回の検討素材は、ピンを使用しなくてもテープ接着で立体を作ることができ、ピンの打ち方による影響がでにくく、間違っただけの場合もテープ接着で修復できるため、素材を無駄にすることが少ない。
4. 適度なハリがあり、取扱いの過程において伸びたり、ゆがんだりすることが少なく、素材がボディに自然にそうため、学生はその素材の表情を見ながら作業することにより切り込むべき位置や方向、分量が自然に把握できていた。また、素材自体に方眼があることにより、デザインや切替え位置の検討および師範の確認において教材として適していることがわかった。
5. 欠点として、ハリがあるためギャザー、フレアー、ドレープといったやわらかさを必要とするデザイン、ディテール、アイテムには不向きのため、布目を保つことが重要となるジャケットやコートなどの構築的なアイテムやデザインに適している。
6. 検証実験に参加した学生の中には、ソフトグリンカットは薄く柔らかいため、扱い難いという意見があった。さらに、シルエットとして捉えた場合、透けていることで逆に見づらいという意見もでた。
7. 実際に検証実験を行った結果から、検討素材として取り上げたソフトグリンカットの方がダーツ量とダーツの先端位置が安定していた。特に後ろ中心のラインには差がなかった。これは、ソフトグリンカットに入っていたマス目が大きく影響していたと考える。さらに、前身頃には大きな差はなかったがこれはバストポイントがダーツの先端として明確な基準になっていたためであると考えられる。
8. シーチングでは、ダーツなど細かい部分にピンを打つ場合に技術を要する。その点において検討素材は、テープでとめることができることから高い技術がなくても安定したドレーピングができる。

衣服のシルエットは、布地の様々な方向性、自重などの布地の特性が面白く絡み合って表現されるものである。さらに、縦緯の布目に注目し、しっかり布目を保つことで美しいシルエットが作られていく。あくまでも衣服は布地で製作されているため、シーチングやその他の布地によるドレーピング技術は欠かせない。

今回は、初心者の学生でもドレーピングで感覚をつかむことが難しい分量感を理解するのに最適な素材を検証するため、条件にあった素材と従来使用されているシーチングとの比較を行った。

今後、ドレーピング教育の理解をより深めるため種々のアイテムに対応できる素材の検討を行い、ドレーピングを学ぶ学生の理解力と技術力向上のための教材を検討していきたい。また、本素材を活用した教育方法を検討し、現場で活躍できる人材の育成に活かしていきたいと考える。

参考文献

- [1]文化服装学院編、文化ファッション大系アパレル生産講座③立体的裁断基礎編、文化出版局、2001
- [2]文化服装学院編、文化ファッション大系アパレル生産講座⑤工業用パターンメイキング、文化出版局、2001